

発達過程で見られた一時的問題傾向について— 生後6年間の  
子どもの発達に関する研究— その2) 一時的に言葉の問題を示した子ども

○岸千代子・鈴木宏子・吉川はる奈・松本倫子・高見澤晶子・原武美智子・富来秀美

金其貞・朴美京・芋花・上垣内伸子・山本政人・水野佛一

(お茶の水女子大・十文字学園女子短大)

<はじめに>

言葉の発達に遅れを心配された子供の中には、成長と共にその遅れが解消していく子供が存在することは臨床的に知られている。我々は正常乳児を追跡調査する中であくまで正常の範囲ではあるが、言語・社会領域の発達指数が一時的に低い数値を示す子どもを抽出した。これらの子どもを本研究での“言葉の遅れ群”とし、その発現の時期、発達指数の変動に注目した<研究1>と独自に作成した絵画図版テストからみた<研究2>から、その発達上の特徴を明らかにする。

<研究1>

〔目的〕

発達途上の一時期に言語発達に遅れが見られる幼児を抽出し、発現する時期、継続の仕方そしてその指数の変動について検討する。

〔対象〕

東京のT病院にて、出産前後の問題がなく誕生した子どものうち、親の協力の得られた152名(6か月時)を対象とした。そのうち3歳までに言語・社会領域の発達指数が85以下(新版K式発達検査による)を示した子どもから、発達に全般的遅れを示した子どもと行動観察、母との問診から言葉の発達に問題なし、即ち検査場面への対応が主因のものと判定した子どもを除外した13名(男児8名、女児5名)をここの“言葉の遅れ群”とした。そして、無作為に抽出したコントロール群22名(男児10名、女児12名)を比較対象群とした。

〔方法〕

親の協力のもとに、生後6か月より半年ごとに縦断的に発達検査(新版K式発達検査)、生活調査、行動観察、神経学的調査を行い、次の項目について検討した。

- (1) 問題傾向の出現率 (2) 問題傾向の発現、消失の時期 (3) 発達指数の推移

〔結果〕

1. 問題傾向の出現率

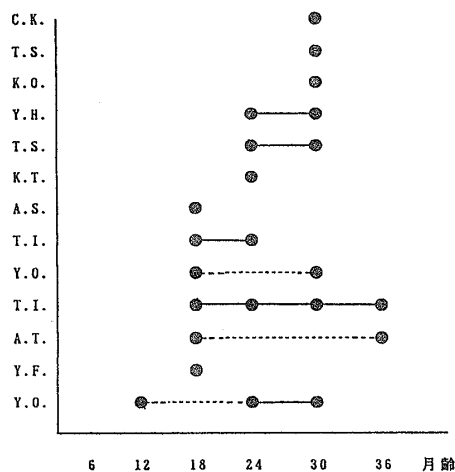
言葉の遅れを示した対象児は全対象児152名(6か月時)中13名(8.6%)であった(そのうち、男児1名は2歳半以降未所で、研究1の(3)発達指数の推移と研究2のデータには入れてない)。また、この縦断研究で、多動傾向群と類別されたものも1名(女児)含まれた。

2. 問題傾向の発現、消失の時期

言語・社会領域の発達指数が85以下(新版K式発達検査による)を示した時期は、1名を除き1歳半以降

であり、1歳半が6名で、対象児の46%、1歳半と2歳で対象児の69%だった。3歳半では、全員指数85以上となった。

グラフ1 問題傾向の発現、消失の時期

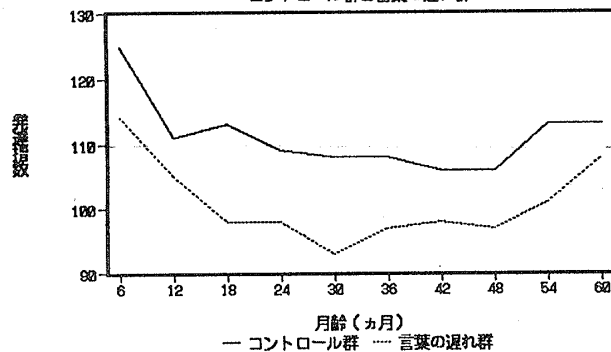


3. 発達指数の推移

1) 全領域の発達指数の推移

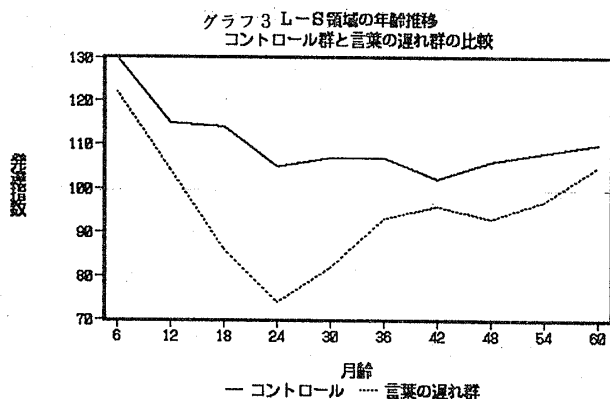
①コントロール群では、6か月では全領域の平均DQ値が124と高いが、1歳以降数値は110前後で安定していた。②言葉の遅れ群は、傾向としてはコントロール群と似ていて、6か月では全領域の平均DQ値が114と高く、2歳半の93を除き、1歳から4歳までコントロール群よりやや低い100近くで安定して、5歳では108となっている。個々に見るとこの問題傾向(言語・社会領域の発達指数が85以下)の消失有無に係わらず、全領域DQ値90以下が、2歳半~4歳半に2~3名いた。

グラフ2 全領域の年齢推移  
コントロール群と言葉の遅れ群



## 2) 言語・社会領域での発達指数の推移

①コントロール群は6か月、1歳と指数が高く、1歳半以降も103～110の範囲で比較的安定していた。②言葉の遅れ群は、指数の平均が1歳半で80台に下降し、2歳を底として、4歳半まで90台で、5歳で105となった。③言葉の遅れ群の中で、1歳半で応答の指差し(+)のものは、言語・社会領域の指数が3歳で上昇し、皆85以上になった。4歳で1名、指数84を示したものはいたが、4歳半、5歳では全員指数100前後となった。④言葉の遅れ群の中で1歳半で応答の指差し(-)のものは、3歳時点でも言語・社会領域での発達指数が85以下のものが2名で、1名を除き皆90以下と伸びが良くなく、4歳半までは4～5名が指数90以下であった。



## &lt; 研究2 &gt;

## 〔目的〕

3歳以降、縦断研究の中で、独自に作成した絵画図版テストを全員に実施し、子供が他者の感情を推測できるようになっていく過程を追跡している。一時的に言語発達に遅れが見られる、本研究の「言葉の遅れ群」を全対象児との比較によって、その特徴を検討した。

## 〔対象〕

言葉の遅れ群は、研究1と同じ。

全対象児は、「その1」一時的に落ち着きのなさを示した子ども」に同じである。

## 〔方法〕

(1) 図版：「その1」一時的に落ち着きのなさを示した子ども」に同じである。

(2) 手続き：「その1」一時的に落ち着きのなさを示した子ども」に同じである。

## 〔結果〕

(1) 分析：図版の回答結果を以下の表のステージに分類した。

表1 気持ちの説明の分類基準

ステージ1	非表出的応答
ステージ2	活動表出的応答
ステージ3	情緒表出的応答①
ステージ4	情緒表出的応答②

表2-① 図版I、IIの状況説明の分類基準

ステージ1	無答、誤答
ステージ2	場面の一部を捉えた状況説明
ステージ3	二者関係の気づきが見られる状況説明
ステージ4	場面全体を捉えた状況説明

表2-② 図版IIIの状況説明の分類基準

ステージ1	無答、誤答
ステージ2	場面の一部を捉えた状況説明
ステージ3	場面全体を捉えた状況説明

(2) 結果：①表情図の選択 3歳～4歳間で、いずれの図版においても全対象児と正答率に有意な差は認められなかった。②状況説明能力 図版II「怒られる」において、二者関係への気づきが見られる表現ステージ3はいずれの年齢でも多くみられたが、ステージ4の割合が全対象児と比して、有意に少なかった。③気持ちの説明 男児、女児とも4歳6か月までステージ1あるいは2の範囲内で留まり、大きな伸びはみられなかった。

## 〔考察およびまとめ〕

正常乳児を追跡する中で、あくまで正常範囲ではあるが、言語・社会領域の発達指数のみ一時的に低い数値を示す群が認められた。この群の中で一歳半で応答の指差し(-)のものは、4歳半まで伸びが良くない傾向にあった。絵画図版テストの結果から、本研究でのこの「言葉の遅れ群」は、「表情図の選択」では、全対象児と同様に、4歳、4歳半で飛躍的に伸びた。従って、この群は図版の状況を認知して、表情図を選択していく力は全対象児と差がないと考えられる。しかし「状況説明」「気持ちの説明」の結果からみると、人と人との関係に気づく能力には全対象児と差がないが、それを表現する力、気持ちを言語化していく力は、言語・社会領域の指数上問題としてはなくなった3歳以降にも、まだ全対象児と差があるということが分かった。